Musical Interaction in Black Pentecostal Ritual in America: An Anthropological Perspective

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18125

氏　　名	野澤　豊一
生年月日	昭和53年11月26日
本　　籍	富山県
学位の種類	博士（社会環境科学）
学位記番号	社博甲第106号
学位授与の日付	平成20年9月26日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第4条第1項）
学位授与の題目	米国黒人ペンテコステ派教会の礼拝における音楽的行為に関する研究 —音楽のコミュニケーションについての試論— (Musical Interaction in Black Pentecostal Ritual in America: An Anthropological Perspective)
論文審査委員	委員長・鏡味治也 委員　神谷浩夫、西本陽一 　　本間武俊、柘植洋一

学位論文要旨

本論文は，米国黒人キリスト教会（以下単に「黒人教会」と記す）の礼拝における，音楽文化に関するものである。研究の主な対象は，19世紀の終わりごろに米国で発生した，「ペンテコステ派」と呼ばれる宗派である。（なお，本稿における記述と議論の主なデータは，現地におけるのべ1年間にわたる人類学的なフィールドワークによる。）

黒人ペンテコステ派教会の音楽は，20世紀の大衆音楽に大きな影響を与えたことや，また即興的な音楽実践やトランス状態のダンスが行われることで，良く知られている。このため，黒人教会音楽に対する学術的な興味は尽きることがないが，そのアプローチは大きく二つに分けられる。一つは，黒人教会音楽を「黒人文化」の代表として取り上げる立場であり，そこでは音楽的要素の「アフリカ性」が関心の的となる。もうひとつは黒人教会の礼拝を「宗教儀礼」とする立場であり，これによると音楽的な礼拝の実践は「信仰の表現」だと説明される。だが，このどちら接近法も，即興的で身体的な音楽的実践の動態を問題にしていない。

それに対して本論文の主眼は，ペンテコステ派の礼拝で一義的とも思える，忘我的なダンスをはじめとした表現それ自体に重点を置き，それらを「身体的なコミュニケーションとしての音楽実践」と位置づけて分析することにある。ここで「身体的」というのは，音楽実践におけるダンスの一義性，および「聴覚経験」に限られたものとしての音楽文化ではとらえきれない多様式性を強調するためである。また，この実践を「コミュニケーション」というのは，礼拝リーダーや音楽家，そして会衆の間で行われる「やりとり」や「同調」こそが，音楽的な礼拝の基礎である強調するためである。

【音楽のコミュニケーション】

本稿における「音楽」の概念は，一般的なそれとは異なる。音楽学（民族音楽学も含む）

において前提される近代的な「音楽」の概念とは，「ある人物により作曲され，また別のパフォーマーにより聴き手に届けられるような実在」である。このため，従来の（民族）音楽学では，「ダンスする身体」や「演奏者間および演奏者ー聴衆者間のコミュニケーション」といったことがらは，周縁にしか位置づけられてこなかった。しかし，ペンテコステ派の礼拝のように，ダンスや歌唱に「即興的に参加すること」自体が重要な音楽的な活動があることを考慮するならば，参加される「出来事としての音楽」という概念も，想定されてしかるべきである。

この「行為としての音楽」および「身体的なコミュニケーションとしての音楽」という見地に立つならば，たとえば「踊る二人」にとっての本質的なことは，二人の呼吸がぴたりと合うことによる充実感であろう。また，「音楽を共演する数名」（たとえばモダンジャズの演奏者たち）の場合では，互いの演奏が「呼応」しあい「重なり」あい，互いを「模倣」しあう過程であろう（このとき即興演奏は，個人の考案物としてではなく，演奏者同士の「会話」として出現する）。

ここで言う「コミュニケーション」とは，「記号（＝情報・意味）の伝達」という意味ではなく，「メタコミュニケーション」，すなわち「関係に関するコミュニケーション」（G. ベイトソン）のことである。したがって，先の「踊る二人」や「演奏者間」の音楽的コミュニケーションとは，あらかじめ与えられた役割を遂行するものではなく，踊り手同士または演奏家同士の間で，その都度構築されるものである。（実際，「同調」を基礎としたコミュニケーションと音楽的な活動には、本質的なつながりがあると考えられる。）

【本論文の目的と各章の要約】

本論文の目的は，「身体的なコミュニケーション」として考察されるべき音楽文化があるということを，黒人ペンテコステ派教会の事例で示すことにある。この作業は，近代的な「音楽」概念のいくつかの前提（e.g.「『音楽』は『音楽作品』で代表させられうる」；「演奏者と聴衆は互いに相容れないカテゴリーを構成する」；「歌唱・演奏・踊りに『参加すること』と『音楽なるもの』は無関係である」）を相対化することにつながるものと考えられる。

とはいえ，黒人教会の礼拝で行われる活動のうち，何を「コミュニケーション」として記述すべきかを示すのは，容易な作業ではない。本論文ではこの問題に対しては，穏当な手段で応じる。すなわち，「主流派」と呼ばれる黒人教会群とペンテコステ派とを対照させることで，ペンテコステ派の特徴を浮かび上がらせ，その上でそれらの特徴と上述の「コミュニケーション」の概念とを照合するのである。

（ここまでは第1章「序論」の要約であるので，以下は第2章以降の要約を記す。）

第2章「黒人教会と教会音楽——歴史的・社会的背景」 では，まず，一般に「黒人教会」（および黒人教会音楽）と呼ばれるものの誕生から現在に至るまでの流れ，および宗派の分類を行う。本稿では一貫して，「ペンテコステ派」と「主流派」を対照させるかたちでの記述を行うが，それらの明確な位置づけが，この章の第一の目的である。

第3章「変貌するミュージシャンシップと礼拝の変化」 では，現在の黒人教会の礼拝事情の背景について述べる。ここで焦点を当てるのは教会音楽家であるが，彼らの教会における身分の変化は，現在の黒人教会の動向を，その音楽の重要性という側面から照らし出してくれる。近年，主流派教会が，ペンテコステ派教会出身のミュージシャンを（しばしばフルタイム契約で）雇うという傾向があるが，これは激しい信者獲得競争の結果である。というのも，ペンテコステ派の音楽家は，人気のレパートリーの演奏や説教の伴奏で，礼拝を活気づける技術に長けているからである。とはいえ，このことは，主流派教会の礼拝がペンテコステ派のそれと全く同じになることを意味しない。「ペンテコステ化」する主流派の礼拝

はしばしば「エンターテインメント」と揶揄されるのである。この一連動きには多くの側面があるが，本稿にとって重要なのは，ペンテコステ派の「参加型礼拝」における音楽が主流派の「観賞型礼拝」で使用されるときに同時に起こる，音楽家の専門化，楽曲の複雑化，そして教会の大規模化である。

続く２つの章は，本論文の中核となる部分である。**第4章「礼拝の比較研究——主流派の「パフォーマンス」とペンテコステ派の「コミュニケーション」」**では，「主流派」と「ペンテコステ派」の教会の代表として選んだ，４つ教会の礼拝を詳細に記述する。これにより，主流派黒人教会群との比較から，ペンテコステ派の音楽的実践の特徴を「コミュニケーション」として浮かび上がらせることが目的である。(礼拝の記述はビデオ撮影を基にしている。)

どちらの宗派も礼拝が「活気づく」ことを理想とする点では同じだが，その達成のされ方には違いがある。主流派教会では，順序だった礼拝のなかで，リーダー（およびクワイア）が「ゴール指向的」に「スピーチと歌唱の技法」を用いることが，礼拝の雰囲気を作る中心となる。対するペンテコステ派の礼拝では，（リーダーの「技法」も多用されるが，）礼拝における明確な指導者が不在でありながら，黒人教会で理想とされる「活気」が生まれることも非常に多い（ペンテコステ派の場合，これは「シャウト（後述）の連鎖」というかたちで起こる）。これは，ペンテコステ派では，信者一人ひとりの行為の幅が広く，礼拝の順序や序列からの多少の逸脱も許されることによるが，ペンテコステ派で礼拝が思いもよらぬ方向へ発展する場合があるのは，このためである。

この章における記述と分析から導き出されるのは，主流派の礼拝が「リーダー主導」の「(狭義の）パフォーマンス」を中心とするのに対し，ペンテコステ派の礼拝は（それに加えて）「会衆間」のやりとり（＝相互行為）が中心になる場面もある，ということである。そして，この会衆間の相互行為は，本来的に「誰かの戦略」に帰すことのできない方向に行動を導くのである。そこで本稿では，後者の礼拝で顕著にみられる「やりとり（＝相互行為）」を，（主流派の「パフォーマンス」に対照させて，）「コミュニケーション」と呼ぶことにする。（ただし，「コミュニケーション」は「パフォーマンス」を包摂する，上位概念として提示する。）

ところで，4章のような「主流派vs ペンテコステ派」という理念型では，両者の違いは指摘できても，礼拝における「音楽のコミュニケーション」それ自体の特徴を記述することは出来ない。そこで **第5章「相互行為としてのシャウト」**では，ペンテコステ派教会の礼拝実践，なかでも「シャウト」と呼ばれる忘我的なダンスの発生とその継続に的を絞って，それらのコミュニケーションとしての性格を考察する。

シャウトが起こる場面では，シャウトを行う者（没入者）の周囲の信者が，その没入者に対して何らかの「関与」を行うのが常である。関与には「注意を向ける」，「接触する」，「囃し立てる」，「シャウトを誘発させられる」というものがあるが，これを筆者は〈没入－関与〉関係と呼んでいる。本章では，この〈没入－関与〉関係を「焦点の定まった集まり」（E. ゴフマン）の一つとして捉え，その構築・組織のされ方を記述・分析する。

シャウトの発生（と継続）の形態には，おおよそ次のようなものがある。すなわち，シャウトが「流れるように」「よどみなく」起こる場合，シャウトが「流れるようでなく」，つまり〈没入－関与〉関係の構築に「間」がある場合，最後に「場違い」で「逸脱的」なシャウトが起こる場合である。これら複数のパターンを，個々の事例の文脈に即して検討することで，「シャウトという相互行為の構造」および「シャウトで目指されるもの」を包括的に考察することができる。

隣り合うもの同士であればスムースに構築されうる〈没入ー関与〉関係だが，物理的・心的な距離が大きくなるにしたがって，簡単には構築されなくなる。そのとき，没入者の身ぶりは「周囲の関与を要求する身ぶり」へと，関与者の身ぶりは「誰かの没入を期待する身ぶり」へと変化するのであるが，これは本来であれば同時に生起するひとまとまりの行動の分離である。そのようにしていったん切り離された「要求」と「期待」とが，再び〈没入ー関与〉関係として統合されるところに，当事者たちの「ユーフォリア」があり，礼拝への参加者には場面の「クライマックス」として受け取られるのである。

第6章「礼拝体験の言説——語られるものと語られないもの」では，それまでとはやや視点を変えて，それまでで考察してきた「シャウト」や「異言」といった実践が，いかに「語り」のなかに取り込まれているのかを検討する。これらの実践は，「聖霊」のイディオムによって，意味づけられ語られるが，これは，礼拝中の行為の「即時性」や「無意識であることと」，さらには「誠実さ」を含意した，豊かなニュアンスを持つものである。その一方で，シャウトの実践は，本稿全体で追求しているような「コミュニケーション」としては語られない。これには，「聖霊」イディオムの優位に加えて，コミュニケーション過程としての音楽的な行為が，意識され言語化されるものとは異なる次元にあることを示唆している。この結論は，身体的なメタコミュニケーションとして音楽実践をとらえようとする本稿の狙いが的外れではないことを，裏付けている。

第7章「結論」では総括的な議論を行う。それまでの記述から，再度「主流派」と「ペンテコステ派」との違いを「コミュニケーション（相互行為）」のレベルでまとめ直す。そのうえで，このコミュニケーションのレベルと，「礼拝（儀礼）」および「社会（教会）組織」とがどのように関連するかについて，考察を行う。そこでは，シャウトが（儀礼的行動というよりは）「礼拝（儀礼）」のなかにある「遊戯空間」の構築であること，また，社会（教会）組織は自然発生的な礼拝を「決定付ける」のではなく「可能にする」のみであることを，示唆する。したがって，ある種の音楽的活動の記述と考察の中心が、具体的な相互行為のレベルで行われるべきであることを述べる。最後に，本論文全体の到達点と今後の展望を簡単に示す。

Abstract

This paper, based on a one-year fieldwork, presents an in-depth description and analysis of the Black Pentecostal musical ritual in America. This musical ritual is characterized especially by song-like sermons, congregational singing, and trance-oriented dancing (called "shouting"). They are generally understood either as the "survival of the Africanism," or the "symbolic action of belief system." However, these views are insufficient as they do not explain (or sometimes, ignore) the dynamic process in the ritual.

The purpose of this paper is therefore to study the ritualistic behavior through their "musical interaction." The term "musical" refers to "musical activities (including dancing)" rather than mere "musical texts," and the term "interaction" is associated with ethological theory of "non-verbal communication," and "pre-linguistic communication."

In my fieldwork, this musical ritual is observed as a complex and dynamic process of interaction between the congregations. This observation is compared with the "Main-line churches," which do not have this kind of dynamism because of the clear distinction between the role of the "leader" and the "layperson." Another important observation is

that the "shouting," while tends to be seen as "individual behavior," is thought that it is a synchronized behavior among and congregations to reach "euphoria" – the phenomenon intrinsic to face-to-face interaction.

論文審査結果の要旨

本論文は、米国の黒人教会の礼拝中にしばしば発生する、「シャウト」と呼ばれる頭や身体を激しく揺り動かす忘我的な行為をとりあげ、その発生のメカニズムを参列者のあいだの相互作用から微視的に検討した論文である。この黒人教会特有の現象は、従来黒人の人種／民族性に帰されて説明され、またその背後で演奏される礼拝音楽が黒人音楽との関連で研究されてきたが、著者はそれを教会の礼拝に集まる司祭、唱歌隊、音楽演奏者、参列者のあいだの発話的／音楽的／身体的コミュニケーションの様態に注目することで、その発生や伝播のメカニズムを解明しようと試みる。

第１章では黒人教会音楽を「黒人文化」としてとらえた研究や、それを「宗教的儀礼」の一部として扱った研究を概観したあと、本論での分析考察の枠組みとなる視点と分析概念を、人間の相互行為やコミュニケーションに関する理論から引き出している。

第２章は黒人教会とその礼拝で現れる教会音楽の暦史的経緯を概観し、宗派の分類を提示するとともに、黒人教会音楽のルーツとされる黒人霊歌の代表的な研究とその見解を紹介している。

第３章は本論での考察の対象となる、筆者が 2005ー2006 年に現地で観察記録した黒人教会での礼拝の背景である、1980 年代以降の米国黒人教会の動向を検討し、とくにその礼拝で重要な役割を担う教会ミュージシャンの位置づけや役割の変化を考察しながら、宗派ごとの特徴的な礼拝のあり方を提示している。

第４章は、筆者が直接観察した黒人教会の礼拝のうち、主流派およびペンテコステ派のそれぞれふたつづつの教会での礼拝の具体例を詳細に記述、提示したうえで、リーダー主導のパフォーマンス的な主流派の礼拝と、礼拝に参列する会衆のあいだの相互行為／コミュニケーションが優先されるペンテコステ派の礼拝という対比を導き出している。

第５章ではそうした礼拝で観察されたシャウトの実例を考察の中心に据え、それがどういう経緯で発生し、そこにはいかなるまわりの関与が見られたかを微細に記述分析して、シャウトが発生するにはシャウトする者の「没入」とそれを助ける周囲の会衆の「関与」がかならず確認でき、またシャウトに先だっては会衆全体のあいだでの「期待」「要求」ともいえる雰囲気や気分が指摘できる、と論じている。

第６章はそうしたシャウト体験を当事者たちはどう語るかについて論じたもので、そこで頻繁に言及される「聖霊」というイディオムの意味するものについて考察し、またそれが周囲の会衆とのあいだのコミュニケーションとは説明されないことについて、筆者が提示するコミュニケーションとしてのシャウト実践が当事者にはそれと意識されないような人間の初源的な相互行為であるからだとしている。

第７章は結論で、それまでの記述と分析の結果をもういちどたどりながら、人間の相互行為に関するゴフマンの理論を引いて、「シャウトで目指されるのは、＜没入−関与＞関係の構築による、ユーフォリア[気楽さ、（ゲームの）面白さ、（相互行為への）没入]の達成である」という、本論全体の結論を導き出している。

論文の構成は堅固で、先行研究への目配りもじゅうぶんであり、論の進め方はきわめて緻密である。自身で直接観察記録したデータの提示も信頼が置け、それをもとにした分析考察も説得力をもつ。分析用語が独特でなかなかその意味するところを把握しがたいのは、従来の黒人教会やその音楽の研究に飽き足らず、相互行為やコミュニケーションというこれまでなかった視点からそれをとらえようとしたための、野心的ともいえる

試みゆえのわかりにくさと思われる。それにもかかわらず、論の構成には飛躍やあやふやさは認められず、じゅうぶんな説得力をもつ。

ただ、黒人教会での礼拝に現れるシャウトとその背景となる音楽を、会衆間の相互行為／コミュニケーションという観点からとらえようとするあまり、シャウトする個人の信仰、その語りで明瞭に指示される「聖霊」との交感という側面に、じゅうぶんな考察が及んでいないのが惜しまれる。著者の主張する、シャウトを頂点とする会衆の盛り上がりとそれによる礼拝の満足感は、教会での礼拝である限りその一側面ではあってもすべてではないだろう。

また使われた資料が 2005〜06 年の調査という一時点で集められたもののため、ひとつの教会での一定期間のあいだでの礼拝の変化を視野に入れることができなかったことは、やむを得ないとはいえ今後の課題として残されている。

こうした若干の弱点はあるものの、独自の視点を開拓しようとした意欲的な論文として評価し、審査委員一同合格と判定した。なお論文副題の英語訳は、日本語の副題をできるだけ正確に英訳したものに修正すべきであることを付記する。